

本願寺派能化の知空著『浄土和讃首書』の引用文献について

飯 島 憲 彬

一 はじめに

知空（一六三四年～一七一八年）は、本願寺派の第二代能化であり、江戸初期浄土真宗教義の確立に努めた人である。

ここでは『浄土和讃首書』^①（以後、『首書』と略称する）の解説に用いている引用文を分析して、知空の真宗教義の研鑽方法を明確にする。

二 首書の形式

例すると、「讃阿弥陀仏偈和讃」（四八首）の中、和讃15（冠頭讃二首を入れての順番）（真宗聖教全書二、四八七頁）の和讃、「光明月日二勝過シテ」では、▲偈云：憬興云：私考：如記。▲三句經云：▲无等等大論：釋籤：十地經論云：。と。内容の解釈は、箇条書きのように▲で分け、その中で関連する文献をも引用する。

「讃阿弥陀仏偈和讃」（四八首）の所依は曇鸞の『讃阿弥陀

仏偈』（真宗聖教全書一、三五〇頁）である。故に各和讃の初めに▲偈云：という。▲「偈云」のみは二五首、また「偈」が付いていない和讃は三首のみである。▲偈云：憬興：と、「偈」以外に他の引文等を並起する形式があるのは、約二〇首である。知空が、「憬興云」と引文したのは、『無量壽經連義述文贊』（釋璟興撰）（大藏經三七卷）に依り、『無量壽經』の説く「弥陀のさとり」を顕すためである。

三 知空の引用文献

I 知空の『浄土和讃首書』の解釈に用いられている引用文献を分析すると次の通りである。（一）内の数字は引用回数

①『浄土和讃』であるから、まず引文されるのは、親鸞の『教行信証』（22）、『愚禿鈔』・『一念多念文意』・『正像末和讃』（各2）である。歴代では、存覚『六要鈔』（これを指南としているからか、25回）、『持名鈔』（2）、『浄土真要鈔』・『破邪顯正抄』（各1）、覚如の『口伝鈔』（5）、等を引文する。

本願寺派能化の知空著『浄土和讃首書』の引用文献について（飯島）

蓮如の『御文章』は1回だけである。知空は存覚に依る傾向が見受けられる。

②所依の三部経は、『無量寿経』（36）、『観無量寿経』（12）、『阿弥陀经』（5）、及び異訳の『称讃浄土经』（4）、『無量寿如来会』・『莊嚴经』・『大阿弥陀经』・王日休の『大阿弥陀经』（各2）、『平等覚经』（1）である。王日休の『大阿经』を引文することは珍しい。この書を知空はただ『大阿弥陀经』と示しているだけである。

③他の經典では、『華嚴经』（19）、『涅槃经』（18）、『金光明经』（8）、『法華经』（7）、『首楞嚴经』（7）、『正法念经』（4）、『悲華经』（3）、『宝積经』（3）、他に、幅広く二六經典の名が見受けられる。『金光明经』は「現世利益和讃」の引文である。また、『首楞嚴经』と『正法念经』は、『浄土和讃』最後の「『首楞嚴经』によりて大勢至菩薩を和讃したてまつる 八首」の出拠として引文されているからである。

④七祖の書籍では、善導の書籍が合計で21、内容は、『四帖疏』（7）、『観念法門』（5）。それに『般舟讃』（4）・『法事讃』（3）・『礼讃』（2）、この三部は「行儀」の書であるから引文されるのである。なお七祖ではないが法照の『五会念佛法事讃』（2）をも引文する。また、『浄土論』・『往生論註』（各7）、『往生要集』（6）、『選択集』（3）、『易行品』（1）、及び曇鸞の『略論安楽浄土義』（1）、源信の『阿弥陀经畧記』

（2）、等を引文する。

⑤中国・新羅浄土教の疏としては、「浄影疏」として、隋の慧遠著『無量寿経義疏』（20）、同『観無量寿経義疏』（1）を引文するが、和讃38「神力本願及満足明了堅固究竟願」の語句（神力・本願・満足・明了・堅固・究竟）解説のために『無量寿経義疏』の一連の文を区切って解説している。

「大經の疏」としては、新羅憬興の『無量寿経連義述文讃』（20）を依用している。他に義寂の『無量寿経疏』（12）等。

「観經の疏」としては、元照の『観無量寿経義疏』（3）の他に、宋の智礼の「観無量寿経妙宗鈔」（1）。「小經の疏」では、雲棲の『阿彌陀經疏鈔』⁽²⁾（11）、慈恩・窺基の『阿彌陀經通贊疏』（7）、元照『阿彌陀經義疏』（5）、湛堂の『彌陀經句解』（2）等を引文する。

⑥中国禪師の疏では、雲棲の『阿彌陀經疏鈔』を引文する。

⑦天台系としては、『法華文句』（9）、『法華玄義』・『法界次第』・『摩訶止観』・『法華玄讃』・『法華文句記』（各1）、『法華玄義釋籤』（2）等を引文する。

⑧中国聖道門の書籍では、『首楞嚴经』の解釈としては、明の正相の『大勢至圓通章科解』（8）を引文し、また長水疏である『首楞嚴義疏注経』（1）も引文する。「現世利益和讃」に関する引文は、「刊定記云」として、宋の長水子璿の『金剛經纂要刊定記』（8）から引用する。

また、僧肇の『注維摩詰經』(6)、良賁の『仁王護国般若波羅密蜜多經疏』(5)、慈恩の『西方要決』(4)、澄觀の『大方廣仏華嚴經疏』(2)及び『華嚴經演義鈔』、天親の『撰大乘論釈』等を引文する。他に俱舍論・唯識・華嚴・起信論・大乘義章等の疏、人名では、慈雲・宗鏡・法位・法聰・用欽・孤山・嘉祥・玄一・飛錫・宗曉等の名がある。

⑨辞書類。『名義集』(9)、『法數』(5)や『説文』、『白虎通』等も見受けられる。

Ⅱ 引用書籍については、当時の最新の書籍にも注意を払っている。その一つがこの『首書』の冒頭で引文する『法界安立図』(明・仁潮著)で、日本では、承応三(一六五四)年に刊行されている。『首書』の刊行より先、七年前の刊行である。この書を冒頭の「浄土」の説明に用いている。他に、次の書を用いている。

明・雲棲『阿彌陀經疏鈔』正保三(一六四六)年刊
 明・袁宏道『西方合論』明暦元(一六五五)年刊
 明・大佑『浄土指歸集』明暦二(一六五六)年刊
 明・正相『大勢至円通章科解』万治二(一六五九)年刊
 日本の文献では、『探要記』つまり『釋浄土群疑論探要記』十四卷(道忠、乗圓著、寛永二一(一六四四)年刊)を「浄土」の解説で『往生論』と並記して挙げている。

本願寺派能化の知空著『浄土和讃首書』の引用文献について(飯島)

Ⅲ 引文の仕方の特色

①引文する時、知空自身がその典拠を調べて記述したように窺える手法である。所謂、孫引き的な手法である。

和讃100の「南无阿弥陀佛ヲトナフレハ 梵王帝釈皈敬ス」の「梵王」の説明を「▲梵王者：「大梵。經音義。梵迦夷。此言淨身。〔初 禪梵天・知空省略〕。淨名疏云。〔梵是西音・知空省略〕。此云離欲。或云淨行。法華疏云。除下地繫上。升色界。故名離欲。亦稱高淨。淨名疏云。梵王是。娑婆世界主。住初禪中間。即中間禪也。在初禪二禪兩楹之中。毘曇云。二禪已上無言語法。故不立王法。」とする。これは実は『名義集』(大正五四、一〇七七頁)からの引文である。

②大胆な抄出をする。

和讃1「彌陀の名號トナヘツツ」で、澄觀述の『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』卷第八の文、「高齊大行和尚宗崇念佛云。四字教詔。謂信憶二字不離於心。稱敬兩字不離於身口。彼論云。往生浄土要須有信。信千即千生。信萬即萬生。信佛名字不離心口。諸佛即救諸佛即護。心常憶佛口常稱名。身恒常敬始名深信。」(大正三六、六六七頁)という文章の太字の部分の抄出して一文として解説している。

四 知空の思想

知空は、「勢至和讃」で、『首楞嚴經』第五の所謂「大勢至

円通章」といわれる15行の経文を解説した、最新刊の明の正相の『大勢至円通章科解』を引文する。この「勢至和讃」は、「経」と「正相科解」を中心として、真宗教義に触れていない。但し知空は『思齊記』では、真宗教義を明かにしている。故に『首書』だけでは、知空の思想は解明できない。例えば、和讃112「教主世尊ニマフサシム」、和讃113「十二ノ如來アヒツキテ」について、知空は『思齊記』で次のように解説する。「往昔等トハ正相云「我憶往昔者追憶最初發心修行之時也…中略…一劫可見念佛一門其來久矣亦知勢至積功之高位也」…中略…大佑指皈ニハ「恒沙劫前有十二佛一劫中次第出」…中略…今家ハ元照（一八丁左）「元照小經疏云楞嚴勢至章云我於往昔恒河沙劫有佛出世名無量光十二如來相繼一劫準大本中即阿彌陀也」（大正三七、三六一頁）ニクミス。則賛ニモ無碍光仏ノミコトニハ未來…トイヘリヨクヨク會通スヘシ。」と。また、「念佛三昧」について、「コレハ実相ノ念仏觀念ノ念仏ニ就テ釈シ玉ヘリ今家ノココロハ称名念仏ナリ。…中略…（三昧について）當家ノ意ハ念仏ノ心即如來回向ノ至心ナレハ非定非散絶思絶言ナリ。」と。故に知空は和讃の基体である経文の内容・語句解釈だけの為に広く仏教一般の解釈を抜き出したであり、真宗教義上の解釈を引文によってしているのではない。『思齊記』は逆に真宗教義によって種々の諸家の解釈を比較検討しているのである。

五 むすび

以上知空の文献を引文する手法をまとめると、

- ① 解釈は歴代では、存覚の著述を依用している。
- ② 当時の最新刊の書籍をも利用している。
- ③ 表面的には、仏教全般に立脚した解釈の為の引用だが、同時刊の『思齊記』では、特に真宗教義を明確にしている。
- ④ 引用方法は大胆な手法で「義」を中心とした解釈法である。
- ⑤ 和讃の出拠等は、後の和讃解釈の基盤を造っている⁽³⁾と言える。

- 1 知空は、寛文元（一六六一）年、『三帖和讃首書』（『浄土和讃首書』『高僧和讃首書』『正像末和讃首書』）を、同時に『思齊記』（独自の解釈を述べる）も刊行している。著述は、その前年、知空二十七歳の時（万治三年）かといわれている。学林でも彼は『三帖和讃』を講義をしている。『首書』『思齊記』こそ彼独自の真宗教義に対する立場が顕されていると言える。
- 2 「この書は、やや後れて出た智旭の『阿彌陀經要解』と並び、明末における阿彌陀經註釈書の双璧として、後世に大きな影響を残すこととなる。」（『雲棲株宏の研究』七二頁、荒木見悟著）
- 3 「現世利益和讃」での『金光明經』の引文箇所は知空と現代の三木照國の『三帖和讃講義』とほぼ同じである。

〈キーワード〉 江戸時代、真宗、本願寺派、知空、能化、『首書』

（龍谷大学大学院博士課程満期退学）